



重修真書太閤記

六編

七



門 5
號 459
卷 57



重修眞書太閤記六編卷之十九

安田作兵衛森蘭丸闘の事

并 右大臣家御生害の事

御殿の中ふを蘭丸作兵衛只二人互ふを伺ふるを
 勝負も見えさうりーか蘭丸いらけ怒聲と共にのーか
 かまきたくきたけは安田静ふ請ふけ入んと働
 を森ハさせーと打えらふ是を名を得ー名譽の鎧合主地
 を容地と入かろり又を縦横十文字くめてふかふかく
 あすの突つれハ以て開き開いて拂ふ鳩尾の息合安
 田を表森ハおく躰ハ緩中氣を屈き以双方牛角のあら



大田記六編卷之十九

ぞひとい見るもの、良もそれハ蘭丸上手と見えたりけり
安田ハ聞えし猪武者なれとも鋭き森り手の内廣場より
引くおひき出し多くの寄手を目おかけを自然と心も他
まぢりさてお持透間をうゆへなれと流して拂ひさら
ふさハ又引あかハ三尺進めハ七尺さかる一二の足の次
第を守らぬこれ度くの軍の場なれハ勇士のふるまひ
ハ蘭丸をやくもこれをささとり乗さゆりてひたくと引
を引きた追かけて椽側の高欄はおりのけ只一鎗も突ふ
とんとおめいさかゝる鎗さきを引てその見と見えける
かひらりと躍りおをすを越さ小庭はあうたんとおも
ひりのかあやよくふ雨おちの切石たてしハ大溝へ脚

ふこそつハ真あむさかつと倒れてふハおけり起上
らんとおもへとも鎧武者袖草摺を敷入ハ狭き溝のど
れを眼をさしけと手足を利ハ蘭丸へより見おろし
も勿体なや大臣家へ手向ひあせハ天罰をおひしれや
とれハ一里鎗取をハ胴も皮肉も碎けよと聲の下よ
り突下ハ十字字金輪際まぞ徹さかハと突とも胴の鉄よ
くてつらりと走へ里相曳の系を突切太股の間へくさと
突こめを男根を半分かけてつさられ安田を精神さえ
かへり得たりやあハと鎗の柄も取付けるを蘭丸急ハ鎗
を引引れて安田を立上りそのす椽へ飛上り刀を抜く
片手うち切えらふハ刀のさへ蘭丸両臍よりおとされ

大岡巳六編卷之十一

二

大剛の勇將ふれとも尻居よろふと倒れふし無念くと叫ぶのそ安田もさけり痛手なり息のよよへるを切りかひる処へ折よく四方田又兵衛をせ来り森の首を取士卒を招き作兵衛をかき出し後陣へおくりて介抱させしと聞えけり御所方おてい川れも持口の軍急ふれハ蘭丸のうたれしとを知らぬしされハ誰一人この口を防ぐものもあらずと四方田ハ猶おく深くさくさけるを御所方おて金森義入走りわたり右大臣殿の御座の近くへ尾籠ありと呼えり切えらへともさや大勢のそこれ入是もあゝまで討れり

金森忠次郎長則二条おて戦死の事金森系圖おそゆ義

入の事所考ふし今暫く本書より従ふ左馬助光俊御所の近習衆追くお討死せるを見て早火をかけよと下知しけるおより足輕共走り廻りて火をさせし本堂客殿大書院小書院庫裏眼藏一時の烟と立のゑる安田作兵衛ハ信長公を討奉り森蘭丸の脚を拂ひしと世お弘く聞えしハ自然と羽柴筑前守の耳おひりし処主君を討し大通人と仰られしと聞て大に恐き天野源右衛門と名を改め秀次公お仕へし処秀次公滅び玉ひしあハ立花の許おかれ居りけるか後おハ寺沢家お仕へしと云り天野京の町家おかれ居て二階より往來を見居たりけるお狼藉もの何り入を殺して血

刀を打ふり往来のものをあやめしふとふ町々難義
及ひ其騒かき大方形ら以時ふ箕浦大内藏古川九兵
衛同く見居て我身の世を忍ふとを打こされ作兵
衛をよお居やれ我く二人して取押ふへいと云々二
階を下る作兵衛筋骨いよと合期と云といへあれ
きのものと云あり居さう下んと云るお階子あり是
ハ箕浦古川り安田を下さしと思ひて引く作兵衛二
階よりのそきこれハ軒下又曲者いたちうりかくと見
るより作兵衛躍り出其者の上へ落つる忽又生捕た
る所へ箕浦古川より来る作兵衛ありめ又見て先
りけいりりよても安田なりと云しと形りその後箕浦

大内蔵古川九兵衛

ハ浅野ふ仕へ古川ハ篠川ふ仕へ安田作兵衛の天野源
右衛門ハ寺澤と曰友ありけるか互又立身の早き方
と十分一の録もさ名仕ふへいと云しを思ひ出し寺
澤八万石のうちを八千石割く作兵衛を召しハ作兵
衛唐津ふ往り然るふふと頬又腫物出来てをふをた
見苦ありしハ醫ふ療治を頼るけるふ醫其治方を知
る天野柱ふ箏の弦を結ひ付其端を頬の肉よからきて
引くハ腫物さけき血おひたくしく出痛す強けき
ともよくせは膏藥うちおとしけれハ平愈たりあり
ふよ日ふらけしてよと始め如く腫ける故又前ふせ
如く箏の弦ふ引切膏藥うちて愈しけるふそれより

大内蔵古川九兵衛

してハ愈れハ腫れれハ引切あすり度くおありぬよ
うてあらせその腫物りと云腹かき切てりせいと云
烟の下より湯浅甚助介俊今をかきりと切きずはるを寄
手の中より進士六郎大夫あそれ敵や我打とらんと鑓取
直して突かゝる湯浅も進士をよき敵や冥土の旅よめ
連そやと云おゝよ立ちひ進士り鑓を切折たり進士の
聞え一早業ふれハ太刀を抜きさうそらふ上段下段手を
盡し堅さ中横さ中筋違は隙をうけふ千變万化都ふ知
ま一名人と紀州ふ名高き上手とかきれハあかゝあかせ
はうめて互よつゝ秘術と習練ハ色をいづれとわき
かゝ湯浅聲かけよれや組んと太刀ふけきて飛て掛れ

ハ心得たりと進士も刀を投出し袖と袖とを引違へ組の
とをれハ刀をぬきもち草摺の石川れより突んとは進士
目をやく其手をおさへ御邊ハ誰湯浅甚助介俊ハ左ハ
ハ誰これハ進士六郎大夫貞則ハ川れも敵も不足ふしい
さそいひさぬさは刀かけたる聲とも共ふ二人手をを
形さは突つらぬあれ死たりけり御所方いつれも花
花くくふる中ひき一人も残らぬ打死右大臣家を障子
越ふ突れぬひ安田り鑓さき御股を貫さけるおすり是
まてとおおふめけん御腹めされハハ襖障子をよ
まかけて火をさし近習の面くおもひくお腹かさうり炎
の中へ飛入く失ふけり今歳の三月武田を亡し惠林寺を

燒むひていま八十餘日を過けし其滅ひ多し不思
議あるける因縁なり

右大臣家ハ天文三年五月廿八日甲午の誕生則ち隨の
六二を本卦と以陰得位の官なり軌數七百廿八陰得位
の六を乘し四千三百廿なり是を宮の八十一おて除ハ
五十三余とある陰位なるを以六を減はれハ全く四
十七余とある天文三年五月廿八日甲午より天正十年
六月二日戊子に至る日實一万七千余日なり三百六十
を以て除けハ四十七余とある
江州安土山總見寺の墓塔ハ總見寺殿贈大相國恭岩大
居士天文三年五月廿八日生童名吉法師天正十年壬午

六月二日とあり總見寺ハ安土山ハあり遠見山總見寺
の額傳内の筆とふ又三州高橋長興寺ハ上下の像あり
其上ハ天徳院殿一品前右相府恭岩淨安大禪定門天正
十年壬午六月二日御他界右信長御影為御報恩相當於
一周忌之辰描之三州高橋長興寺與語久三郎正勝寄進
之天正十一年六月二日とあり
總見寺右府公一代の行作善惡相半ハ云と云とも其尤
後世ハ徳を施しハ戲山を燒しを最と以如何と云
ハ戲山の僧更ニ傳教の徒ハあり慈覺の門ハ入ら
徒冒し驕慢なるもの也右府の雄烈威断よく是を燒て
其巢穴を破られハ絶代の器識と嗟嘆堪以嘗て戲

山の上へ僧坊小宿一其所業をとり小財あきハ都小出
く祇園下川原小棄財あきハ坂本小下りて在家小親一
む更ふ半身の寶持坊あると如く負小一てたよかくの
如く設令富鏡ならば其勢制一わたき正殆如茂川の水
の如くあるへ一

明智左馬助誠忠遠慮の事

并日向守衣を刺事

わ、て一かとよ余煙まきく天を蓋ひ炎のひらめく正千
丈の電光ふさよ似たりかくてハ右大臣家遁色小へき
路ありそやく殿中ふ入りきか一奉らんと寄手一同は煙
をりけつ馳入ける処は並河金右衛門御座の間といま

た全く焼をえらさる処を見出士卒小下知一て火を消
させ水をうち半焼つる障子襖を取除右大臣家の御自害
ありて半を焼爛れたる御首を獲立上り一ハ白綾の御
單の血よけられ焚のこりたる御袖を引切てこれを包
左馬助の前へ持参一是を出し一ハ左馬助一目見てい
り小右大臣殿の御ある一に糸を於一但存を於子細あ
れハ今日も日向守殿よ見をま一き光俊た一ハ預中
是といへハ金右衛門大又怒りこむ心得ぬ中条ハ今朝
よりの粉骨たたく此首一川みゆものをされハ焦土とふ
うえてぬまにと手を碎き片時をあらそひ取得一ハある
一ハそれをかくして日州の御覽よ入ま一きとハ何とぞ

とあれハ光俊威儀を正し其不審を云ふに然るを光俊
見を後しとつハ心中を語てヤさん聞多へ去三月十三日
信州称羽根あて右大臣殿武田勝頼の首を向ひ傍若無人
の由ふるまひありてをまさしく見ゆ聞ゆて疎ま
き正ふ思ひり今日ゆる目を見ゆひり右大臣殿と武
田とハさまて深き仇讎とつハあはれまこと互に面を
合せたたらひり中あはれ程深きよりともけ
色ハ肝ふ銘骨刻きてまらぬれぬりとの恨もけ夫
さへ杖ふて打ゆふありま日州と右大臣とハ正し
主従の恩ハあれともまこと思ふ陪たる恨あり側みて見る
さ名勝をたちり不との正も何りけま主の身もてハ

何えかりり口惜くも悔しくも思ひ川らん御邊ふとも大
形を聞川るともあるへしよ何もおもふと我身も取て
を雲泥万里の違ひあるをやされ此御首を日州に見を
たらんふも極めく右大臣殿の武田をあいらひゆふま
して何ゆる不思議をやふしあへき左あらハ忽ち日
州の不徳をまいて取ゆりたる天下をも俄に失ふへ
其時よりいりふとも我等りいふ正をさるけく正有
ましきけり然故をもて今日ハ日州を見をまると云けり
御邊ハ何とおおもふ左におもふは但光俊り僻事かと
云ハ並河も意おち居左様は深く慮らせゆあての御事と
知る浅くしきヤ奈今さら裏を川りりく覚ゆまわくも

大関記六編卷之十一

御邊の御計ひおろそかと申さるる光俊阿弥陀寺の生養清
玉上人を呼びひそく此御首を預け置也
又一書お光俊並河おいひけるハ何様右大臣殿の法老
るに相違ふ但大臣の首級を取らぬ實檢もせし
ふよも作法あり御邊をそれを知り我等も實檢式
習ふて後見べしと思ふなり明智天下の取初無禮
をふしていあるまきなりそれゆゑも弓矢の上にて取つ
る正ならぬ又様もあるへこれハ正しく御自害あり
しを求めいし川る形は責る明智ハ手柄もあら
はよしなき無禮を顯してせのそしを招るんも願え
しつしといひしとあり

日向守ハ大臣殿の御首の見えぬを不審し色々と探索め
しよ更よ知されハ齋藤内藏助を以て左馬助何とて大
臣殿の御首を取らんと責しハ光俊御殿の焼跡にて
探得る由にて血の付たる白綾の單の袖を出し
ハ光秀これをさしけ持て熟と打るめ實も大臣殿の
御衣あらんと云さゆ刀を抜き白綾をさし徹し少快氣
よ見えしと白衣さへ如斯きさ御首に向ひるハいら
あるとをやふし川らんと今更光俊用意の事と感し
けり妙覺寺にてハ信忠卿本能寺より還御ありて晝の暑
さを忘れんため御湯ひくをられ御酒をいりて後御寝
るに南ふあたりて人馬の馳ちる音せし一尺事から

大開己六編卷之十一

以と宿直の面々起上り兎も角も本能寺を心元
けれあゝとに向ふ一手ふれと打出あ折しもあれ
村井長門守父子三人を参り本能寺へ罷り向ふひ
は明智光秀謀叛を起し彼處を十重廿重圍きて勿
く入かたく然より此方へ馳参りしとやは信忠卿さ
りと二条御所より歸り親王若宮を禁中へ奉れと下
知し玉へ畏れとて村井八御前へ参上りこれハ正親町
院の皇子誠仁親王の御事也後陽光院とて是く若宮と
ハ後より即位すし歸りて後陽成院の御事なり爰も毛利新
左衛門福富平左衛門菅谷九右衛門ヲけるハ敵の此
方へよとけけへハ早く安土へ引返り此旗を上られぬ

そく逆臣退治陣を回らるへくらはと勧め奉るといへ共
信忠更に聞入るを以愚ふるをすりのかる是程の事を
思ひ立ちものり信忠に還るへき路は人数をふさぬ正のあ
るへきや一日の命おしに信忠父を棄て逃たりと云ま
たらんは誰のハ信忠に催促お從ふへき二条お楯籠り逆
徒を待て一軍して尋常お腹を切ん然とて信忠に首ハ勿
論屍を灰とるを死したる後逆も逆徒もかのをおおせ
よと下知し玉へハ川を渡り道ありくを適あ
ふとの心よてハ争てり再度の合戦あるへきやさらハ
持口を定めて寄る逆徒をまたんとて二条を籠る人こも
野々村三十郎赤座七郎右衛門團平八郎齋藤新五郎坂井

大開言六編卷之十一

大開言六編卷之十一

越中守櫻井傳七郎下方弥三郎同喜太郎服部小藤太同六
郎兵衛逆川甚五郎水野九藏山口半四郎塙傳三郎河野善
四郎寺田善右衛門鎌田新介津田又十郎同源三郎同勘七
郎同九郎次郎同小藤太菅谷角藏同藤次郎村井長門守同
清次郎同作左衛門毛利岩丸赤座新太郎篠川兵庫下石彦
右衛門種村彦四郎春日源八粟原吉藏小澤六郎石田孫右
衛門宮田彦八郎平野新左衛門同勘右衛門高橋藤九佐々
清藏山口小弁村瀬虎丸小河源四郎神戶次郎作大脇嘉八
犬甘孫三郎石黒彦次郎越知小十郎淺井清藏水野總助井
上又藏加藤辰丸竹中彦八郎河崎與介等也小沢六郎三郎
猪子兵助町家子旅宿と一りかくと聞より直は二条へ走

入るまゝ尾州の梶原左衛門子嗣子の松千代生年十三歳
信忠卿の御供して上浴つるは折ふ一病はやくして町
家より臥て居たり一我を二条へ具してゆけ寝るから
ても敵を防ぐんとあせりけるを家の子なりける梶原又
左衛門かく制さのまぢいそりれゆるよ逆徒一旦勝利
を得るとも織田の家は減るふあは多しの君達
さてハ柴田瀧川羽柴るんと不日切て上るへ一緩く養
生して後の忠節を盡し給へ今日ハ某御名代は御所へ走
入りへ一とて鎧一縮一馬は打乗諸鎧を合せ御所へ参上
一松千代り志のふとを言上りけはハ中將殿聞食是めて
敵をふとさゆへとて白柄の長刀を賜えり一ハ又左衛

大岡記六編卷之十七

門ふとかハ勇まざるへき再三お戴き大庭まで水車の
如く打振あえれ御長刀やよほ敵を千七何れ二千七あ
れ只一ふりけうちとらんあゝ面白の軍の景氣やと大手
ふ向ふて固く近比名譽の次第なり

重修真書太閤記六篇卷之十九終

重修真書太閤記六編卷之廿

二條合戰中將殿御寂期事
并齋藤新五郎戰死事

三位中將信忠卿ハ前田孫十郎基勝を召出され不慮不
斯成行と更人怨むへきにあはれ但三法師ハいまた
幼推あり早く立退を成長の後其方補佐して國郡を
よ急けやいそげと仰出さるるに基勝涙を押し何方
供とあそ存し誥をいふれ若君の御事ハ餘人へと上
かハ中將殿以外の御氣色損し其方あらてハと思召
色ハあそ仰付られし夫を違背すは七生の末かけ

太閤記六編卷之廿

御勤當と仰られし一孫十郎畏此上をて涙とて
小三法師君を懐おかり奉り敵のをさすを遁れて岐阜
へ飯其後清洲へ入奉る

前田基勝四十四歳の時なり妻ハ村井長門守春長の女
此時中將殿の近習あて七千石を領を三法師ハ後小岐
阜中納言秀信卿の御事也諸本玄以とあせとも薙髪せ
ハ亂後の事

三法師君御退去ありしハ今ハ心安し然ハ軍の用意せ
んと五百餘人を三川よりけて大手搦手中將殿の旗本と
まきまもあはせし備を立る寄手ハ本能寺の競まつれ押
寄來り城ハ平場ふ堀せそく堀卑し息を續をふ只一時

不責おととと隊伍とたして責をとも成るハ必死の勇兵
か今日をかきりと命をおもひ弓ハ三人張五人張箭種
を盡しと射出し銃炮八十錢二十錢三十錢乃至ハ百錢の
強藥玉も藥も遺して何りせんとおめかへく打程も屏風
を立廻したる如き寄手ふれハ空矢も更ふあゆけり前
は進し兵士たかく打るれハ後陣もさはが進まかぬて見
えハハ大將明智次右衛門光忠大あつりひ甲斐ふ
さもの共の振舞か鬼神を欺く信長公の籠らせむひ
本能寺をい速は落して面く手柄をあらせしにあは
や爰の中將殿を猶も乳臭き若君なり侍中も大將お
も蘭丸などの者ハあはせ光忠不繼けやと呼をりて真

先をわかれハ光忠リ馬廻リあどハ先こもこらあへ
き我先小と馳出ー大手の城門を乗入んとも合たふ処
を城中より見まきー光忠リ左の袖の脇つをを上さぬ
打抜ーり大事の手ふれハ志をーも咄元馬より真逆
落るをきて城中みてハ関を作里て悦ひ叫へハ寄手ハ大
小力をおとー光忠を肩お引かけ後陣へ引東山あふ知恩
院の塔頭お入る養生に日向守かくと聞より若者とも
敵をあふとるー左様又不覚をけ取川る形窮鼠の猫を
かむと云とをハ知さるよや四方田但馬守を川くそと
呼を政孝こくおと進よる光秀四方田を近くよひ大津
山科宇治伏見淀唐橋八瀬鞍馬口鷹ヶ峯雲母坂白川龍華

越と人数を己けて後詰の用心又向をせ流まとも此城今
日こらへさ勢あハ悪かてふん光忠あまりおそやと手
を負川敵も大手の勢をすーたるおらん御邊をやく搦手
おむりあそ打落ーりあへーかまへて敵を侮まぬ
よとて着たる羽織をあふれえ但馬守あれを著ー只今
此城攻おとーヤへー御心安くおかーめをこひひも果
馬よ打乗我手の兵士三百余人を真丸おそあへ児玉黨の
とふれハ團扇のさーもの面高の旗さーて二条の城の
らめてある室町口へ押寄て関をど川そそ揚たけける是
をそそ今峯頼母尾石與三藤田藤八郎中澤造酒之助以下
の侍大將これおとらーと續きさうり城中みてハ大手の軍

強かり一か共寄手の大将を打落し生死を去る秘と勝色
見えていさまたつからめてみておとるまー今日の軍
み打勝て一夜こらへハ安土岐阜其外處くの後詰の兵士
も上洛屯へさあうを前後より引包んで光秀を打取ん
と掌みあま悦び勇て待かけ一処おれハ四方田と見
るより鉄炮を打あけ大矢を射出かとも寄手てこーも
ためらえれを城門の前まで押つめ同く鉄炮をうた
をー不どみ城兵うちあらまされて控見へたりける但馬
守斯と見るよりをえや打あちさる控城門を打落れと
下知しけれハをえにをえ侍とも馬をのりをあー
乗をあー城門の下へこま入大槌を以て関貫を打折んと

あーけ色ハ城中みても責るハ四方田あり尋常の敵みあ
うけ切て出さ追をらへやといふ聲と共に打て出寄手の
方にハ今峯尾石田中左右お開きて城兵を真中お引包ま
んと計てけるを見て城兵ハ包まれーと小勢をえつと引
ちらー鶴翼お開いて切廻る城兵こぞかと小勢あらんと
ハ思ひもよらぬとあれハどりく同士打を控えたりける
理ふるか責るハ四方田武藏七黨お名を得ー武士なり
防くハ天下の若君城介三位中將殿の御馬廻りへ掛れハ追
出さ追出さるれハ取てかへし大浪の逆おくか如くまーハ
潮のよくみ似る寄手て城兵よ比ふれを目お餘部大勢
あま終り切あを急いく聲を出さ押あへきは城兵た

かひまけり引かへを寄手續いり乗入り此時城中以
 の外子混雜一上を下へと採何ふをきて寄手まはく力を
 得新し手をいれ替くせり立一程も名を惜し忠をおり小輩
 ハ一足も引一引あつと諫め合あるひも首をとり川をられ
 川又ハ引組さ一違へ敵味方の死骸ハ不らく算をきたし
 積てハ岡の正く山の如く血ハあんと流れし砂を紅し
 そめたり城中より福富平左衛門と名乗る大太刀を打振
 打振堅ふ打り横み切拂ふ勢ひあたかも破竹の如く是
 こそたり何ふもの多くハ手を負疵をかりむらぬあ
 りけり明智方より小島三郎右衛門是を見て彼ハ福富平
 左衛門我打取て高名よせんやと川ぶやきあから切て出

いう又福富とのと聲をかくれいさつあも小島三郎右衛
 門あさら弓矢よ疵はけしよふいて平左衛門り刀力され
 あぢ能くころまよと云より早く打合と三十餘合を戦ふ
 たりされとも小島ハ荒手なり福富を多く敵も出合て氣
 つりれ力おとろへしハ終り小島ふ切ふをられ押えて
 首をとられけり其跡より菅谷九右衛門大身の鎗をまう
 せうと打ふりて向ふ敵をつきふと四角八面ふくるひま
 はまけるを四方田の内者桐野佐助定秋と名乗る十文字
 の鎗を以て走り掛り去るしハ挑を合けるか九右衛門ハ
 老武者なり佐助ハ若く盛あれし遂に突ふせ首を取中將
 殿の近習なりける竹中彦八郎生年十八歳猛虎の岩よ

る如く勢風に乗るが如く前小あらされ後よかられよく軍
一けるを四方田きつと見て優りやさしき弱武者のあつ
それたのもしく見ゆるものか然とて是ハ敵ありの
見ましきと云りと見れハ片手打打拂ふ刀のさへて
彦八郎あえらを切れ息絶たり是等を始として毛利新
助平野甚右衛門小川六三郎三人一処又進を見て四方田
御所方の若き衆いれも見事又見えさせぬ味方なく
そへ軍させて見ましきものを去とて控れもかあま
一処又切たかえゆけと憂世かれやと云ふから三人を
三方又突ふたり逆川甚五郎同甚六郎栗橋備後守青木
次郎右衛門藤川兵庫寺田喜右衛門是を見てうめまき扣

えたる寄手の中へ走てわうう 能戦ひ一足もひり討
死をわく外へ梶原又右衛門かの拜領の長刀を以て寄
手を四方へ難ぢら一太らとあがりて戦ひけるか四方
田と見るより哀れよき敵や我うち取て閻魔の廳の土産
みせをわといふよりそわく寄あふ無手と組志のふと
ハ猛けれといりてり但馬守あ川へさあえしゆを合り
と見けるも但馬守片手小又右衛門を引はか三間あま
りを投てし起上らんとする処をた一鎗も突ふせた
り搦手の軍かくの如く急なりハ明智方今峯頼母尾
石與三藤田藤八をそしめ究竟の兵士百余入城中して討
またり然共寄手を本能寺を責しものまても隙あけ

馳加て一かハ二陣三陣入替り息も繼あへん攻戦ひ
其上城の北ある近衛殿の御館の屋の棟より上り火箭を射
かけ、忽ち本丸の書院の妻より焼上りを見て明
智十郎左衛門光近柴田源左衛門勝定齋藤内藏助利三大
手の門を打たふれとて大なる杵を以て搗け、貫木折
て扉を左右へ開きたりさて埋草を用意して堀をうめ寄
手雲霞の如くこゝろ入ハ此手を防ぎ織田源三郎勝長津
田又十郎長利同勘七飯尾茂助山口小弁以下今ハ是さて
けりと切切ける光秀り手より三宅藤兵衛松田太郎左衛
門加治石見守御牧勘兵衛をせ加るり大音上大手の軍ハ
勝たるを引る續けと聲くお呼それハ十郎左衛門内藏助

くをよよくせよ一人なり共をや切入て中將殿の御志る
一を上奉れと下知しけるを聞る源三郎勝長ふく光近
そあふ退そと鎗取のへ突おふを光近さつと見て御坊君
まてましゆしけるかと云ふ早く馬より飛ちり鎗取直
し乗らせぬひ馬の平頭を突しハ馬を躍り主を落
おゆるを其伏突ふとてあるしをい取たりけり津田又
十郎是をきて馬の頭を引かへしけるを齋藤内藏助ふ
と云もあえは太刀を以て打合けるや頼て引組志るし
と合し又齋藤力やまさりけん津田を組敷終り首を取城
方四十八騎雑兵一百廿四人おるし枕と討れけり爰又齋
藤新五郎長龍とつら濃州稻葉山の城主山城入道道三

う孫ありて左兵衛大夫龍興の弟なり道三の女ハ信長の
 御臺ありて道三との壻岳父の間から然るも道三其子
 義龍の為と襲を自害してけるも信長岳父の仇を復さ
 るやと謀らるゝ迄もて果され是ハ今川と取合のころ
 むれハ其内と義龍早世ありて龍興の代とありけるも
 信長濃州へ攻入むハ龍興あるは城を開いて越
 前國へ遁れつるにより濃州ハ信長のか國とありて也齋
 藤の一族多く諸國へ牢人けるも此新五郎ハ幼稚なり
 さけり齋藤の一跡断絶せしめんも心あらはとて信長尾
 州へつれかへり一字を與へ長龍と名乗らるゝ之生長も
 從ハ心雄一と武藝も人々勝れりハ中將殿と暱近して

此二条もこもり一日頃の恩義を思へハ父も増てか
 たけりけり大臣殿を討し明智あり其旗本へ掛入差違を
 やと思ひて討出けるも光秀り足輕二段三段ハ筒先を
 ろへり待あけりもより馬驚て進得る新五郎大と怒り鎗
 を取て立上り三位中將殿の忠臣齋藤新五郎長龍なり大
 逆無道の光秀ハ何くおるやと立出て長龍り鎗の穂
 先の尖とさを請とるもやと言は光秀り手より北田帶
 刀り弟の同七藏氏教打出て鎗を合を新五郎莞爾と笑ひ
 我ハあえぬ敵なれと其志を褒美のあり此世の暇と
 らせもやと云ふから只一鎗と七藏り咄輪の間より脊中
 へかけ鎗さき白く突出り老りハあえれむハ七藏その

おく息絶たり是をえりめとて敵多くつきふせ猶本陣
 へ志さし進む後又聲高く中將殿のおそしまた方へそや
 ここのれとよはるるを聞き長龍馬引かへし城中へと
 馳行を齋藤内藏助よき敵ありと思ひしりし走寄てこれ
 を見れい覚のおさる顔古主の末子如何せしと思案を
 不跡み味方の聲く小當の敵を見のかた誰あるぞと呼
 えりよはるる襲ひ来る内藏助ハ新五郎お向ひめはら
 や齋藤殿我等小追をて何處よ脱多ふぞといそれ新
 五郎馬を立直し脱るとい何とぞ慮外もめと云ふに
 おしもちりき突出し鎗の穂先の一往一來いとも烈しき
 勢をあしらひあねて内藏助二足三足おしりかへさる折し

ち先手の足輕り助け来て新五郎ハ草摺のそりきより
 腰のあしを貫く長柄の鎗長龍ちとも驚うし太刀を抜
 ち切拂ハ長柄ハさられて足輕ハ尻居まどふと倒れた
 され共足輕少も撓まは切せし長柄の柄を以て新五郎ハ
 乘たる馬の前足を横に拂ハ馬ハたちまち膝をつく主ハ
 馬より下たんとおもへとも腰の痛のつよくして馬の頭
 ふうりむくそつと兜の鞆のききまより清らみ見へし首
 筋を飛切つて内藏助をのしと切ハあやまたは首を前
 へ落たりけり長柄の足輕走り寄長龍う首を取てかけ出
 以を内藏助呼留相打の首をさのそ急くとかるといそれ
 て足輕も立りと死

内藏助利三八道三八道の甥なり然ハ長龍とハ從弟違
 小當る然る小利三八義龍小美濃を追れ一ハ捷なく
 明智光安八道の家をたのまかれ居ける内ニ齋藤家
 亡ハ一ハ八稻葉一鉄子仕えけるの後ニ稻葉り家を立
 退明智光秀小仕小是ハ光秀の妻ハ利三の姉なれハ
 二条の城の東口ハ村上和泉守國清溝尾庄兵衛茂朝山
 本山入村越三十郎景則波下部權頭負繼同小大夫を始
 明智方大山の崩る如く嘯とおめいて乱入ハ城中よ
 り小猪子兵助一元茲ニありと名乗のけ當るを幸小切拂
 小合離の曲尺の達人なり寄手大ニ仕負され六七段も追
 るひけられ兵助ハ氣色をよ息絶るたる処へ村上和泉

守り郎等小神谷吉兵衛と云者一里寄お一並へてむを
 と組あそ一ハ程ハ捻あひけるハ吉兵衛力やまさりん
 終ニ組一き首を取城方より團平八宗忠と名乗て討て出
 今をのきりと戦ふなり是ハ万松院義晴將軍小仕奉りし
 左京宗近子なり元ハ兒玉氏ありけるハ將軍より團扇
 を賜るより一より團と改めたり一とハ北田帶刀これを
 見たりたり合遂ニ切ち首を取村井長門守春長軒入道
 小死狂ひニ狂ひ廻りけるを三宅式部り手のもの多賀
 一角一里向ひて是をうりハ一程ニ三位中將殿早
 御自害あるへ一と鎌田五介をめされ御腹十文字小ハ
 き切むひそれうてと御意の下ニ御首を前ニ落けるを五

介をく取收め頻て御殿は火をかけたうーかを黒烟天を
焦して焼上るゆゑ程は近習の面々さー違へく炎の
中へ飛入く死してけり織田源五郎長益は右大臣殿の弟
にてこの頃村井長門守り許ふおそーける軍と聞やい
ふゆゑともしねく落ふ鎌田を三位中将殿を介錯一奉
り御首をいたして庭の井筒へ飛入けるゆゑさや此
井一丈をりの下は横小穿ち一処ありあや一とあゆら
爰は入て其日をくらし夜半計りふたとり一闇路をさく
れは花こー明りのさけを見とめ夫を出れば庭の築山の
ゆけなりそれより思ひる岐阜へ下りけり其外中将殿の
御供は菅谷角藏毛利新左衛門坂井越中守赤座七郎右衛

門舎弟助六櫻木傳七野々村三十郎下方彌三郎高橋藤丸
佐々清藏山口小舟神戶次郎作石川彦十郎水野總助井上
又藏加藤席丸安藤源内いつれもくいささよくあを見え
たりけり爰は松野平助と云ものゆり西義濃の住人よて
初は安藤伊賀守ふ仕えけるか伊賀守配流の後ハ右大臣
殿はめされて千貫の地を領し此時ハ八幡は參籠して本
能寺の亂は居あふゆいりふちして光秀を刺そやと思ひ
立齋藤利三と知由何れハ行かたらひーか共光秀用心ふ
かく勿く以て近く寄付は刺生捕て吟味せよやるといふ
由を聞いさーあまーのなると仕出して耻を見んゆりハ
と云腹切て失はけり又土方次郎兵衛ハ白川は在て本能

寺ハ死ては落去一ちりきよ只今二条の合戦急あつせんきゆうふりと聞馳きこゆき一
かとも明智あきらり軍兵充満あつまんして勿なく近ちかく寄よりた一いて宿やどの
ある一いを頼たのむ遺記いこを故郷こきやうへ送おくるふと一いてのち腹はらかき切き
て失うせはけりか一い後光秀二条表のちふ一いて勝鬨かつとぎの式しきを執と
行おこひ末すえわ一いらば門目かどめさゆ一いく控見かへえたりけり

重修真書太閤記六編卷之廿終

重修真書太閤記六編卷之廿一

光秀妙心寺へ引取事

并注進織田家凶兆の事

人皇百六代正親町院あきの御宇天正十年六月二日戊子明智
日向守光秀謀叛むげんふより織田右大臣信長公をよひ三位中
將信忠卿京都所司代村井長門守長春軒をそ一いめ森蘭丸
兄弟織田源三郎勝長以下良臣雄士多く生害一い本能寺二
条御所一時の烟けむりと立たちのり一いかハ洛中洛外の騷動さわどう大方
ふくば男女老少おとこふささけひ巷ちやうま迷まよひ道みちふくむ往昔永祿
八年五月室町御所を三好松永まり侵おり奉たり時民家を狼

籍一僧坊を亂妨せしとを以て十八年前の事也ハ資
財雜具をもちてこひ身を隠し災を避んと東西不立忍ふ
も理ふれ也此時禁裏御所ハ土御門富小路ふれハ二条御
所と七八町を隔たりされえ関の聲矢叫ひ鉄炮の音手ふ
取様又聞ふれハあま男女の互ひ一げふ哀ふ聲も耳ちり
是を如何に事とやと不審て尋ぬれと正しき事實
を誰も知れ攝家宮方清華の雲客羽林名家殿上の四位五
位六位藏人非藏人御藏小舎人などみ到るまで御所參
上御門くくろさしこめて非常をいさめ出入を制む
其日もててふ西山ふかたむくころ明智日向守ハ勝關の
式をふし下立賣大宮の西なる華園妙心寺へ入る本陣と

以寺中以外の外ハ混亂ハ光秀これを制し其身を方丈へ入
軍勢ハ本堂庫裡ハ居あま残り残るを門外町屋ハ寄宿せり
住持禪師光秀又對面ハ寒温終て後今日浴中の騒動と
りくの風聞ハ得共擅越安恭又入寺あまハ合戦勝利と知
るたり但事の始末ハ於てハいまた其實を審りよと以そ
もく軍の次第主客の進退畧して演説ハへとありハ
光秀あたへけるハ定め其大畧を聞召川らん右大臣信
長公ちりころ我意甚しく万事氣隨ハ執行ふれ嫉妬偏
執を以て舊好新參の差別ふく大將達をハいさくに配
流一玉へハ群臣薄氷をふる親疎深淵又臨むおもひを
ちり日蓮衆をおしこめ浄土真宗を滅ぶハ天台宗の根本

中堂を焼く百王鎮護の靈場を亡るは今又高野山を破滅
一真言を断絶せしめんとは是を志むく諫めてはハ光
秀又勘當を蒙り坂本丹波ともふめ一放たる依り止るを
得る本能寺小參上し今一應諫めを入りさんと伺候して
はハ蘭丸光秀の謀叛と立たるや矢を射出し光秀討
と仰出され其上よりやまりしは自害ゆふつ二条へ參
上し若御所へ入んとせしハ若御所もおろしく光秀
を悪ませむひ且御自害ゆひし之就き光秀當寺小入心や
よく腹切んためは參向ゆ之日頃の御好は眞苦をのりる
へき一句を示しるへ且追福の料はこれ參らせしへしと
て黄金百枚を施入しけるより後をハしは禪師大和

尚あえれよおもえれいりふもして光秀の自殺をとりめ
そやとてまけ外料を呼よせし疵を療治し折傷をも直
させなどして後役僧を以て傳奏甘露寺權大納言經元卿
のもとへ注進しけるハ明智日向守車當寺年來外護の檀
越よりふより本能寺并ふ二条合戦の後入寺して士卒を
休息せしめ手負ふ療治を加え心任せし立退せし後より
光秀腹をらんとし若し光秀自殺して彼手のもの共
京中お浪る者たらハ押入強盜さるハ辻切あんと絶る
夜とてハゆまし鬼も角ふも京中靜謐の所を知らひ
肝要ふれぬれと言上せしハ傳奏い川をふ諸卿銓
議の上お沙汰あるへしとて使僧をハかへされ直に參内

ありき奏聞も及ひたり

流布本難波中納言宗豊卿傳奏たるよを注ぎ難波家ハ

從三位宗富卿延文六年四月十一日四十四歳して早世

の後中絶せしを飛鳥井權大納言雅庸卿二男左少將宗

勝朝臣をして相續せしむと云ハ疑ふへし妙心寺執奏

ハ甘露寺家なり

右大臣信長公今日の變ふ當里の前後表も志も有

しと之申つ今年正月二日の夜右大臣殿不思議の夢を見

玉ひかり慶を何慶とも知れ土おろ作里し嵐あり忽ち走

り廻りかたへし立たる木の馬の股を契けるかその馬た

ふれしと見て夢を寤みけりゆふ變夢ハ博士の占文を

召れて吉凶ふより御慎あるへきふ横紙をふりの信長公

於れハ在こし御心よ掛玉を以と之今おもひ合をれハ

土の嵐ハ戊子して光秀享祿元年戊子ふ生る木の馬を甲

午なり信長天文三年甲午ふ誕生ありき土の嵐木の馬を

喫て倒しける正光秀謀叛して信長公を侵し奉りける前

表なりと後ハおもひしられけりまも不思議なまけ

ふを京童り花乃さかりハ吉野山法師も錦から衣をけり

ふれし春乃色惜めと終り水絶て時よ散らん嵐を花の

あた於れやと五人三人うたい何れきのふを此室の花の

下々ふ白川の志賀の山越あれも唱ふこれ意まねした

い川し京乃上中下うたをぬ人を於けりけり信長公の

御事あり其後子判断しめる人ありて語るをきけを花
 乃盛るとい織田家の繁昌を云吉野山法師ハ信長公の小
 字の吉法師といそれハ當に錦唐衣とい信長公の田舎
 子生れて二位乃右大臣子昇進ありハを云きめられし
 春のいろとい信長公武將の權柄を取て諸侯を指揮し玉
 山を云おしめと終に水絶てとい四月水の運絶ふあたる
 をい光秀謀叛の志この年三月甲州亡びしより後ふ起
 るを云時よりちるん嵐を花の仇ふれやとい光秀土岐の
 支流なるを以てなり嵐ハあらし山をふそち丹波より京
 に出る路なりとい句を釋しけるハままにふしきのと
 なり又愛宕山より光秀所願成就のため祈禱乃百韻興

行ける發句お時を今天り下る五月かると吟せしも
 時と土岐をこころふくそ天り下とい日本六十餘州を
 以て詞なり知とい知行のこころなりハ土岐氏にて日本
 六十餘州をこの五月より知行せんと祝言と聞えたり
 第二は水上増る庭の夏山といけし水も水上を水の本なり
 光秀の源氏ふたとふハ庭の夏山ハ平地の築山あり平
 地ハ信長平氏ハ築山の築と盡とを通して平氏の盡る
 心をふくそしこころふとを天は口あり人を以てい
 そむと申あやめん妙心寺乃使僧立かへて甘露寺殿
 乃西のへのおもむきを演しハ何さ傳奏の心の終
 に沙汰もある海一奏聞の上諸卿詮議の条最さも何るへ

一としてまゆ使僧は祿をあたへ持後より諸軍勢へ手當を
あし四方の口くへ人數をさし向残る勢をは妙心寺乃表
裏より西を木辻東ハ大將軍まで居こられて終夜篝火た
くを用心をひくありけり

堺庄御見物の事

并 妙國寺蘇鐵靈夢乃事

濱松御所ハ五月廿一日安土を出御ありて洛陽に赴の
とられけるふより右大臣殿より長谷川於竹を御賄茶
屋四郎次郎を御案内またま川ら
長谷川竹丸信長公ハ仕奉お竹と称を後豊臣家ハ仕へ
藤五郎秀一と称し叙爵して東市正と称し從四位下侍

從小任を筑後めて十万石を領と云駿河住人小川次
郎左衛門尉正宣の男なり味方原の軍ハ御供し馬の
前ハ戰死し藤九郎正長藤四郎正供の兄弟なれハ
御親しく思召さる故なるへ

京都処く御見物あてて夜舟よめされ難波よれ着石山本
願寺の舊跡野田福島の形迹を御覽し天王寺入御聖徳太
子の弓矢をえしめ靈佛靈寶御覽の後住吉へ御動座あり
岸の姫松幾世り經ぬる千世の影御心のとて遊覽ま
ほし境の津ふ着さ玉ひしハ長谷川於竹と茶屋ハ御暇
下され右大臣家京都へ着御あらハ知を奉るへしとの
意なり然妙國寺ハ入御ありて彼名の聞えし蘇鐵を御覽

ありあはれ又實は七類すれふ名木ふも永祿五年當寺建
立のとき三好實休植へ処なりとゆや今より廿年を
りの正形をえその時川くよりか求得てり川植へ
ふへ又此津ハ往昔より異國船の出入あきは九艘小路
舳松ふと云処もあるせり四五日御滞留ありけるうち
右大臣家御京著の御案内あるへきとありと多ふは其事
あけきハ不審は思召本多平八郎忠勝を御使として京へ
のふをられける小京より輕尻馬ふのりてをさ下るもの
何り忠勝と途中不行逢よく見れハ茶屋四郎次郎形茶
屋忠勝ふ向ひ川くへ御使ふやと問忠勝ハ川くへ
登くそと問茶屋中へく明智謀叛して只今本能寺を攻お

と一ニ条御所よと里かけ右大臣殿内生害必定と承
此の事注進のため堺は向ひ川と云忠勝某ハ右大臣家
より御案内延引ふ事罷向ふ事伺ひてとの御意ふ
て只今是迄罷出は処なり左あふんふハ京へ上るも詮ふ
一是より引返へ可中とて茶屋と共ふ堺は向へ鞭をあ
堀ふさ寺社町人とも參上へ目見して所持の珍物名
器を御覽ふ入へハ其夜ハ亥の刻過て御寝なりけるふ
誰とも志は御枕上は立る京ハ大變あり御身あやうし
何やうへそやく當津を御立あきて本國へ御歸りあるへ
路次ハ山たち一撥多あるへ間道を以もとめあるへ
くはと中けるふよりさいふを何ものそと仰られへハ

其もの謹で晝名木ぬり靈あるへーとの御意を蒙り者
ふゆとやて蘇鐵のあけよ入ーと御覽して御夢をさめぬ
けり夜いまた明ざるふ御近習をめされつるふーきの
夢を見たりとふもわくふも危あきといふとを聞てハさ
くふよ如しと思召は供を控へよと仰出さるる処へ本
多平八郎茶屋四郎次郎を伴ふひ御前へいり四郎次郎
上ゆハ今曉七半あろふゆひーやらん本能寺のかたよ
當りて関の聲おひた、ーく聞えゆよより何事ふやと存
ー立出をハ明智日向守謀叛して右大臣殿を襲ひ奉る由
ふゆひーり忽は黒烟天を焦して本能寺ハ焼失ーまもぬ
く二条も火掛りゆへいりれも西御所とも御生害

とヤ沙汰よゆと言上ーけるふよりさてハ今曉の夢まさ
ーく蘇鐵の靈の告ーは相違ありとて天下を知めー諸寺
諸社の御朱印出されー始めは蘇鐵は御朱印を出されし
とかや御供の面くいつれもあされえて鬼神をもさうひ
ーくへき御勢の信長公を明智の分際よてたをたたく討
そのふーきさよ然らハ何處を經てを多くと三州まで歸
御あるへきややいふおとあれ塚の津よも信長公生
害の沙汰聞えて上を下へと混乱限里時よ本多平八
郎中上げるハ御供の人數いりも不知案内の者ふゆ但
明智かふとの正を思立からぬ路次も大あた閉り里ゆへ
ー是よりまの河内國を南都よ出和東よのり信樂を伊

と聲と聲くふはるに數百人よて取あめしとよ一人
も残らばうたれけり

駿河國庵原郡井上薩埵村靈泉寺小穴山陸奥入道梅雪
の位牌あり靈泉寺殿古道賢集大居士俗名穴山梅雪天
正十年六月二日まゝ像もあり土佐光吉筆なり讚ハ信
州伊奈郡開善寺の中興武田道遙軒の子よて速傳和尚
と云僧形ふて掛絡をわけ刀をさしたる体なり山城名
勝志は宇治一の坂より田原郷口へ二里八町坂路なり
田原郷ハ入口とほく谷中ひろし今十五村あり誠まか
くれ里といひへき奇境也といへり
御所ふはをては野殿越よさしつらせむひ三十餘町の

嶮路を經むへハ多羅尾道可入道御迎まといりやめて御
先よ立ち我館へ入奉り御供の中ふハ多羅尾とては御心
ゆるしあるへきにありけり野心をうさしをけり
川らんと疑ひ思ふ人もあはけるを本多平八郎とて
出てやけるハ左様よりさるれを理あるふ似されとも多
羅尾もハ野心をふくむたらんハ逆もわくても道るへ
き道形一面も小塚を出るよ里快く飯をもをさるる力
きてよ川うれたりい川れも道可なりよのまにあり
て腹よくふくらめ氣力を復しあふるぬ時ハ切死に死ふ
んをありをやく飯の用意をよとやけるを入道聞てい
りよも道理至極をりさらハ我等り野心ふる印は是等を

實小奉らんとて長子半左衛門其子幼稚の男子幼少の女
子半左衛門の妻いりれも御側より伺公して御馳走ける
ふより始て上下安堵のおもひをありあけり

參州大濱に著御ハ天正十年六月四日船りこれより
二日泉州堺を御發し信樂に入御其夜伊賀を越て三
日勢州白子より角屋七郎次郎船よめさとるひく

重修真書太閤記六編卷之廿一終

